淀川水系木津川における川づくりの取り組み
—住民主導で伝統工法を復活させよう！—

小林慧人・北野大輔・山村武正
（淀川管内木津川グループ河川レンジャー・やましろ里山の会）

発表の概要

淀川水系の一級河川木津川の河岸には、江戸期に水害防備林として植栽されたマダケ林が現在放置されて残っている。この有り余った竹を有効活用し、住民主導で川づくりをしようという「木津川プロジェクト」が行なわれている。この取り組みでは、流域住民・河川行政・専門家・職人など様々な立場の人や団体が協働する体制が整っており、現在、河川事業として動いている。

2015 年より伝統的河川工法である竹蛇籠（じゃかご）水制 6 基が製作・設置され、設置により生き物の生息環境が創出されるかなどが検証された。この様子は、第 12 回共生のひろばのポスター発表「水辺の竹林とどう付き合っていくか一級河川木津川での挑戦「竹蛇籠製作プロジェクト」で紹介した。

続いて、2017 年には伝統的河川工法である中聖牛（せいぎゅう）を３基製作・設置し、2018 年には３基が増設された。そして、それらが河川環境・治水へ与える効果が、学術機関により検証されている。今回のポスター発表では、2017-2018 年に行われた竹蛇籠（じゃかご）・中聖牛の製作・設置講習会の様子、また、各地への波及状況を中心に紹介した。

2017 年の設置時には、中聖牛の周辺は平らな地形であった。しかし、数度の大水を経験したのち、中聖牛の周辺の土砂は大きく動き、たまりの環境が出現した。このような物理環境が作られたことにより、止水域を好む水生昆虫の生息が新たに確認されている。

木津川河岸のマダケ林の林内

2018 年 10 月　製作された竹蛇籠

2017 年 12 月　設置直後の中聖牛

2018 年 10 月　中聖牛周辺にはたまりの環境が創出